



公使公邸(現在の大使公邸)。当時の正門は、現在、裏門になっている。

アラーは結局これを受けることに同意したが、日本でカナダの国威にふさわしい行動をとるための活動経費として、給料のほかに自ら年五万ドルを出費する覚悟だ、とキング首相に話した。キング首相はあえて反対しなかった。キング首相は、上級外交官を選任する際に、彼らが給料のほかに個人の資金を持ち込むものと思定して、意図的に資産家の中から人選を行っていた。もちろんこのようなことは、当時の国際外交の慣習に反していった。

とにかく、アラーはその任務をでききと、見事なほど完全に進めていった。一九二九年二月末頃までには、一連の提

案事項をまとめ、首相の裁量を仰いだ。まず、自分がロンドンに行つてイギリスの当事者に相談し、新公使館にふさわしい調度品や服装を購入することを提案した。また、「カナダ全国を遊説」することも提案の一つであった。全国の主要都市を巡つて、有力者クラブや商工会議所で、彼が公使に任命された理由を説明し、ならびに日本で待ちうけているカナダの貿易上の可能性について関心を高めたいというのである。「公使の仕事は赴任先の国にあるだけではない。自分が代表する母国においても大切な仕事がある」とアラーは確信していた。アラーは、その後、何度も同様のカナダ遊説を行なっている。

スタッフには優秀な人物を



大阪毎日新聞社を訪問した(1923年末)ときのアラー公使一行。

当時の外交活動というのはごく貴族的な環境で行なわれていたが、アラーはこのような環境にごく自然に溶けこんだ。外交官は依然として「紳士」の仕事であり、当然正しい教育と社会的経歴をもっているものとしていた。公使館の「ナンバー2」になる人間には歴史学の博士号が必要だ、また他の公使館職員には「すぐれた文章術、立派な容姿、優雅な作法はいうに及ばず」古典と外国語の素養が必要だとしても少しもおかしくない、と主張した。そして、「教養と性格の両面から見て承認できる人物、日本人々との交際において慎重であり、またあらゆる点において思慮深く忠誠心のある人物」の採用しようとした。アラー自身の高いレベルにスタッフが確実に順応できるように、またスタッフのことに關してはどんな些細な問題でも予め知悉し統制できるように、彼はスタッフ候補者の案事項をまとめ、首相の裁量を仰いだ。

アラーは、公使館での部下に最良のスタッフを揃えたいと考えていた。外交官というものは、「一言一句、一挙手一投足に至るまで細心の注意をもって判断し、行動しなければならぬ、期待するところの成功を少しでも傷つけない損つたりすることがあつてはならない。……スタッフは全員が完全に同一の見解を堅持していなければならない」と彼は主張した。そして、「教養と性格の両面から見て承認できる人物、日本人々との交際において慎重であり、またあらゆる点において思慮深く忠誠心のある人物」の採用しようとした。アラー自身の高いレベルにスタッフが確実に順応できるように、またスタッフのことに關してはどんな些細な問題でも予め知悉し統制できるように、彼はスタッフ候補者の案事項をまとめ、首相の裁量を仰いだ。

アラーは考えた。そのような人々なら、外交官としての責務を十分に果たすことができるし、カナダの利益と名声を守り、友好関係を築くことができる、そしてまた政治上、商業上の条約を協議するに当たつて適切な補佐をとめることができる。アラーは首相に対し、彼と彼が自ら選んだスタッフがどのようにに努力しようとした。この設計プランが上がつてきたの

と、もしもそこで働く施設条件が適切でなかったら、彼らの努力が実とは限らないと告げている。すでに彼はモントリオールに手広くもつていた不動産関係の手づるを通じて、ある程度の子備調査を行なつていたが、そこでわかったのは、一九二三年の関東大震災による荒廃のためであつて、適切な建物を見つけることはできそうもないということだった。これはかなり問題だった。というのは、彼が信用を得ようと思つている国、本国に送る報告に必要な情報を得ようと思つている国の芸術、文学、スポーツあるいは園芸など、たとえ自分が興味をもつていなくとも、その国の人々にとって興味のある事柄に公使自身が関心を示し、親しく会話を交わす——そうした社交活動によつてこそ「達成できるのだとアラーが確信していたからである。」「このような方法を最大限に可能にするためにおそらく最も大切なものは、友情と信頼を得ようと思つている人々を楽しませ、もてなし、関心をひくことができるということにある。通常の公使館業務ももちろんおそろかにしてはいけぬが、効果的で価値のある公使館業務の大本になるのは、正確かつ有益な情報である」と彼は考えていた。